

発行日 *** 2014年6月1日

e-mail: akutagawa_dayori@yahoo.co.jp

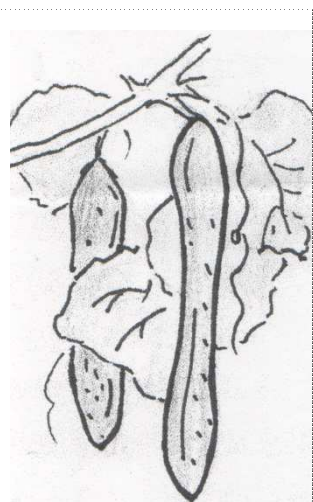
皆様からの投稿をお待ちしております

着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2-14-3

Tel 072-681-8870

一部50円です



沈黙する村

村の住人である町長が二期目の選挙を迎えた時のことである。4年前にあれほど沸いた村の衆が今度は鳴りを潜め、行き来を控え家の中へ逃げ込んで、家の奥間でじっと無言で坐っているとさえ思われた。最初の時は、代議士の後ろ盾を得て勝ったのだが、今度はその代議士が敵の陣営についたのである。小さな村であってもなかなか一枚岩のようにはいかない。反対陣営に親戚縁者を持つ者もいるからだ。しかし、勝ちそうだと、そんなことはもみ消され村中が一枚岩のように盛り上がる。誰しもが平穏なくらしを乱したくない。利害がぶつかる選挙には、どんな火の子が降りかかってかわからない怖さがあるからである。

母は「選挙はきれいじゃ…」という。国政選挙ならまだしも、町議選などになれば町内の親戚、知人から何かと言ってくる。しかし、町議選はまだまだ、十数名の当選者がでるから、選挙後もやりやすいが、一騎打ちの町長戦は、後々まで尾を引く。村八分などは昔のことだと笑い飛ばすのは簡単だが、村で暮らす人にとっては昔ごとではないのだ。村の暮らし

は微妙な人間関係で成り立っている。この関係が少し変わるだけでも住み心地が大きく影響を受けるのである。同じ名字の家が株講を作って助け合い、先祖の血縁を大事にして付き合っているのも、村の人間関係を維持するためである。村人が、負けそうと読んだ空気から、よからぬ軋轢が生まれぬよう出来るだけ穏便に時とともに消し去る方法として、選挙の期間は沈黙する村を装っていると思えた。

そんな村の空気を変えたのは葬式であった。葬式は家々の関係を反映する。家同士が近くも遠くもなり得る機会なのである。遠戚である村の婆さんが亡くなったと聞き、急いで帰り母に「今後世話になるはずだから、すぐに酒屋に電話して酒を届けてもらえ。ここで惜しんではいかん。葬式だから先方も断われない…」と忠告したものだ。

代々その地で家を守り暮らして行く事には、理屈では割り切れない知恵を必要とする。小さな村で何代にもわたって暮らし続けることの難しさは村人でなければわからない。村の古老は「街では夜逃げをするが、この村では一度もない」と自慢げに話していた。田んぼや山を持って逃げるわけにはいかないからだ。理不尽と思えることでも無下に異を唱えず時の流れにまかせて消していく寛容さと機敏さのバランス感覚を使い生きてきたのである。(嘉)

女人結界7

このようなケガレ観が広がるのと時を同じくして、キヨメを仕事とする職能集団が登場する。それが「非人」といわれる人たちである。「非人」集団は、寺社や官庁に直属するという社会的な位置づけを与えられていた。それは、ケガレをキヨメることのできる特殊な力をもっていたとみられていたからであろう。

当時の人びとは、ケガレにたいして忌避、嫌悪するだけでなく、畏怖していた。ケガレは、人間にはどうしようもできない自然の力につながっていると考えられていたのだらう。そういうケガレをキヨメる力をもつ人たちを、聖別された職能民と畏れたのである。

遊行女婦、白拍子(しらびようし)、傀儡(くぐつ)といわれる女性職能集団も社会的地位は低く、網野さんは「女性の無縁性」といっているが、女性は、人ならぬ力、聖性を帯びた存在、聖なるものに結びつく特質をもった存在と考えられていたようである。

仏教の、女性は五障三従の罪深い存在であり成仏できないという差別観は十二世紀に定着するが、それは京都の貴族社会のなかのことであり、やがて民衆に広がっていく過程でケガレと結びつき、女性不浄観が芽生えていく。(猿)(13ページに続く)

孫がくれたラジオ

今から20年前、私は病院で手術後の身体を横たえていた。

「おばアちゃん」という声でびつくり。目の前にかぶさるように孫の顔。

「ラジオを持ってきたで、これを耳にあてて聞きな」枕元に置いてそのまま帰ってしまった、孫の姿。

音楽と選局のみ、シンプルなもの。電池の入れ替えに、電器店へ行った。

「へえ、こんなラジオ見たことないわ。骨董品や」「こんな今時分売ってないで」

ずいぶん勝手な事を言いながら電池の入れ替えがすんだので、私もすかさず「電池は現代のもんか」

ポカンとした顔を尻目に、お金を払って退散。

ラジオを聴くのはフトンに入ってから、深夜便を聞く。今日の声の主は少し変だな、風邪気味か。一生懸命想いを届けようとしていることがわかる。

ラジオをくれた孫も30才を過ぎている。

「お前がくれたラジオで、おばあちゃん長生きしてるワ、ありがとう」

春秋の彼岸にも必ず墓参りに来てくれる孫、主人も喜んでいるだろうなアと思いをはせる。

子供の頃に聞いた真空管ラジオのような音のするのとてもいい。

いつまでも、このほのぼのした音楽を楽しみたいものだ。

本物の味

味覚が退化し、本物の味がわからなくなってしまった自分を知る。

食の伝承は、「昔型を残しつつ今風に変えてよし」と思っている。

昔通りの手間をかける必要はないけれど、先人の知恵や心は引き継ぎたい。

実家へ帰って味わった味噌汁から、お嫁さん、とつてもきつかったけど、味噌から、つけもの類、しつかり教えてもらったワ。

おかげで味噌汁もつけものも、家内中美味しいと言ってくれて、やりがいがあるという。

弟嫁はん、自信たつぷりの顔で話して夜が更けるのを忘れる位。

弟があきれて、

「ようそれだけしゃべることがあるなア。朝が来るぞ」

自分の母、こわかったもん私も、味噌、醤油、手作りの専門の小屋も今は鉄筋に変わり、からうすも精米機になり、農機具もすべて腰をすえて頑張っている。

父が捕ってきたウナギ

私には、こんな想い出が、夏休みの

風景。お母さんが井戸水に冷やしていたスイカを車つるべにのせて「わットコサ」といつてにぎやかに掛け声をかけてスイカを切ってくれた。

父親は川魚つりが好きで、もんどりかかえて「ウナギが入った」とご機嫌で帰ってくる。

大きなタライに移す。今おもいだしても、どつとする位、うなぎ、うなぎ。

手際よく、父はすぐさばいて炭火にかける。母が汗水たらして焼き専門。

次と次と焼きあがる。「さアなんぼでも食べ」という。こうばしい匂いを消すように、せみの声がさがしかったこと。

近所へ焼きたて持参するの、子供の役、焼き立てのウナギを食べてくれた近所の人達も、すっかり若い人に変わり、そんな想い出をしても通じない。

土用の丑がくると、あの匂いがしてくる。こどもの頃の幸せな気持ちをそのまま。

脳の再起を願って

やらねばならないこと、やるべきことは山ほどあるのに、なかなか気持ちだけはゆらいでいる。

長生きの秘訣は、強い足腰と異性への関心といわれて、へえっ。私そんな気ないけど。

あらっ、イヤダ釣りだけもらって品忘れ。ちよっと、お客さん。これっ品物お忘れですよ。

待ち合わせ場所、勘違いして迷惑をかけたリ、なんと情けないことか、と嘆いている。

昨今、すっかり忘れたこと。人の名前など、思い出して脳の活性化へ、おとろえかけた記憶力を再起させたいとペンをにぎり、走り書きをして反古の山に囲まれている。

俳句

俳句

土田 裕

闇に現れ闇に消えたる螢かな

宛先のにじみし手紙額の花

記念樹の残るキャンパス青嵐

大和路は降りみ降らずみ桐の花

乙女てふ名前に魅かれ苺買ふ



《闘病記》 15

空想の世界

梵店主

入院2か月でやっと筋肉の破壊が止まってきた。CPKの数値も2000位まで下がったが、医者の迷惑とはだいぶズレていて、ステロイドに代わる薬の投薬を考えている様子であった。

ステロイド剤も当初の60ミリから40ミリに順次減らしてきているのだが、副作用は弱くなるどころか、強くなってきていた。相変わらず寝むれないし、食欲も抑えられない。9月半ばの季節替わりのためか、足腰の寒気がひどく看護師にたのんで、布団を二重に敷き小さな電気カーペットを足元に置いてもらった。

気温が1℃変化するだけでも体調が影響を受ける。院内は完璧な空調管理が行われていても外気の温度が下がると身体は変調を訴えてくる。

痩せ衰えた足腰をさわりながら、よっちゃんは考える。この先どうなるか知らないが、大きな山をひとつ越えたような気がした。五里霧中の山をなんとか越えたのだ。おぼろげな地図を頼りに歩き続けて来たが、確かに山の頂付近にさしかっているのは間違いない。

幾たびも冬山で遭難しかけた時の感触がそう思わせるのだ。

確かに死線は越えた。ひとつの死線は越えたに違いない。死の恐怖感が消えたのだ。どうでもよくなったのである。そんな事を考える余裕が無くなったのかも知れない。見舞いに来てくれた友人に「俺は死線を確かに越えたと思う」と言うとは「それはどういふことだ」と興味深く聞いてきた。「死線を越える」ということは、死を意識しなくなることだ」と答えた。どうにでもなれと開き直っているだけかもしれないが、自分の奥底では大きな変化が起きたと思えた。

家内にも度々、「俺は、無責任な男だと思われようが、家族や仕事の事はなんにも考えていない。おまえ達がどうなるかと知らん。好きにやってくれ」と。家内もあきれた調子で何も言わずに聞いていた。よっちゃんは、だれが見舞いに来ても同じような言葉を熱心に言った。

ある時、親しい尼さんが、買い物車に、寺で作ったトマトと味噌つけの沢あんを詰めて汗をかきながら来てくれた。二度目である。老いた尼僧の姿に目頭が熱くなるのだが、彼女と話し出すとついつい止まらなくなつて悟りとはなんぞや、死線を越えるとはどういうことなのか…と説教をす

ふたりの話は、一向にかみ合わないのだが、妙に気が合っているかのように話が続く。

いつものように、最後に尼さんがよっちゃんに「あんたは信心を分かっている。法華経の魂を理解している」とおだてながら「早く法華経に帰依したら」と勧めてくれるが、よっちゃんには全くその気がない。

よっちゃんは、大きな寺の伽藍を見るたびに、仏教が形骸化した象徴のように見えるのである。よっちゃんは、尼さんに寺本来の姿に戻るべきだと説くと、尼さんも同感で宗派の会議に出ても嫌になるとぼやいていた。「ろくな話もしないから出るのをやめた」

尼さんは、「尼はまだよいが、爺さんの住職はどうしようもない。困ったものだ」とぼやく。世間と同じだ、仏門に入っても世俗の欲は絶ちがたいのである。だから、尼さんの寺には坊主を寄せ付けならしい。

尼さんも「自分の弟子たちもわかつちやいない、法華経を…」といつも嘆いている。そんな尼さんに、よっちゃんは偉そうに言う。「どこの寺も、きれいに掃除され門が閉じられ他人の出入りを拒否しているように静まりかえっている。檀家衆や住職だけの空間にみえる。このような寺は本来の姿ではない」

尼さんも「うちの寺も、あんたが言うように、だれ彼なしに来て話をするような寺にしたいが、尼寺だから用心が悪いからなかなか出来ない」

「しかし、大きな寺などは住職の見栄で作ったもので、本来の仏の信仰とは関係ない。むかし、池上の本山では、参道にライ病患者が列をなしていたし、本堂の中にも貧しい人たちが集まってきていた。寺は貧しい困った人たちに開かれた場所であった。それが、今は変わってしまった。乞食みたいななりをして寺に行っても受け入れてくれる処はないだろう」

我々は、いろいろな恐れを抱いて生きている。人の心を動かす大きなものは恐怖感である。その中でも、すべての人が感じているのは、死に向かう時の流れである。高齢にもなれば、たえず過ぎていく時間を呆然と見ながら、自分が刻々と死に向かつて生きているのだと気付くのである。

宗教は、この人の弱さを救うふりをしながら、その弱さに付け込んだような事をしているのではないか、とよっちゃんには思えてならないのである。



ダイエット余波で

買ってしまった!の巻

マイナス一〇キロのダイエットに成功して、私は気が変になりました。気が変でなければ、買わなかったはずのものを買ってしまったから、間違いないと思われます。まず、お値段から言いますね。六十三万円。大きさ? 掌にのるぐらい。重さ? 掌いっぱい羽毛ぐらいかな。ここまでのヒントで、「もしや?」と思う人がいたら、大変ご無礼ながら、髪の毛が少々、心もとないことになっているのではありますまいか。そうです、買ったやつたんです、アートネイチャー。女性用部分カツラ。松坂慶子と野際陽子が宣伝している、アレである。

オーダーメイドをうたっているの、で、買いに行ったのが四月十四日で、出来上がるのは六月末。私は月末が忙しい仕事をしているので、七月初めに受け取りに行くことになっている。だから、手元がないもの、ことを、書こうとしているのだが、発端はダイエット。いやはや、恐るべし。今まで着ていた服がブカブカになり、私はせつせと服を買い始めた。それもオレンジ色とか。パーミントグリーンとか

妙に明るい、はつきりした色のものを。母親が呆れながら「今はいい時代やわね、アンタのトシでそういう服を着られるねんから」と肯定とも否定とも取れる感想を述べていたが、気にしない、気にしない。気が変になっている人間に怖いものはない。

青春、アゲイン!である。正直に言つて、一〇キロ痩せたからつて、見た目がよくなったつてわけではない。そんなことは自分でもわかっているのだが、「この私が、一〇キロ痩せちゃったよ、オイ!」と嬉しさのあまりテンションが上がつてしまつて(これを、ひとは気が変になったと言うのではないだろうか)、体重計に頻繁に乗る、鏡をしげしげと見る、など太つていたころは意識して避けていたことを、真剣に繰り返すようになった。体重は朝と晩に測つてカレンダーに書き込む。鏡を見ては溜息をつく。テンションは高くても、現実には忍び寄る夜霧、ではなくて老化だからだ。「このたるみを、こうギョツと引つ張りあげられたら」「このシワがヒュツと伸びたら」と妄想を膨らませ、美容整形外科のチラシを「ホンマに効果、あるんやろか」と見入つたりしている。世間的には、かなり低いレベルではあるが、美容とかおしゃれに目覚めてしまつたのである。殺虫剤のCMの言葉がまさにびつたり。「人

生、最後に落とし穴」。そこに嬉々としてはまりに行っているのが今のワタシだ。そういう流れの中に、レディスアートネーチャーがある、と思つていただきたい。

私が向かつたのは、大丸・心斎橋店会場。春前からお試し会が各地の百貨店で開かれていて、四月に入つて、客足はガタンと落ちていた(言うまでもない、消費税が8%に上がつてしまつたからだ)。その人影もまばらなお試し会場に行くと、おねえさんが満面の笑みで近づいてきた。百貨店の催し会場の「おねえさん」はほとんどが、「昔おねえさん」(アンタに言われたくない!という声が聞こえたような...)だが、アートネイチャーのおねえさんは正真正銘のネイチャン(つまりめダジャレである)。賢そうな、若い子だった。いくつか、お試しカツラをかぶらせた後(カウンセリングをした後、と言うべきだろうが)、すぐにお値段を明かしてきた。「標準タイプで五九万円です」。

た、高い!! ウソだろ、帰る!と言う人が少なくないのだろう、「先に申し上げときますけど」とは言わなかったけれど、そんな印象。もちろん、私は気が変になっているから、動じることもなければ、「あらつ、そんなにお高いの。またにするわ、ごきげんよう(NHK「花子とアン」より)」とも言わずに、買う

気満々。実は、三十万円ぐらいかなと思つていたので、「げつ、高い!」と内心、思つたが、「買う」決心をして来ているのである。引き下がれない。

買う気あるんだ、とわかると、アートネイチャンは俄然、意欲満々。「こういう感じ、いかがですか?」と次から次へと、頭にのつけてくれる。はつきり言つてどれも気に入らない。取つて付けた感じがあまりあり。売る側にしたら、「ふわつと華やかにイメージチェンジ」を狙つてくれているんだろうが、私はそういうのは苦手だ。つむじのところが、少しきびしい。中高年女性の半分ぐらいがこんな風だと思つたので、深刻に悩んでいる、とまでは言わないが、そこんところがさりげなく埋まれば、いいんじゃないかなと思つて買う決心をしたのだ。私はアートネイチャンに言つた。「リアリティを追求した感じがいいんです。つまり、少々分け目が見えても、痛々しい感じさえなきや、いいんですけど」。アートネイチャンはぴくつと反応した。リアリティはアートネイチャーの辞書にないのだろうか。必要以上に「盛る」からカツラつてわかるのだ。この視点、社長に言うておけ、今以上に儲かるぞ、と思つたが、もちろん言わなかった。このカツラ話、次回に続けさせていただきます。(AO)

六割主義

伊藤 明(精神科医)

私は治療のなかで、何人かの患者さんと話し合いを持つことにしています。そのなかでよくよく「六割主義」という言葉を使います。私の言う六割主義というのは、次のようなものです。

「日々の生活の中で、仕事などに常に十割、百パーセントの力を出しているのは、ギターなどの楽器の弦がピーンと張りつめた状態に似ていて余裕がない。弦が少しでも弾かれると、パチンと切れてしまうような状態だと考えられる。だから、毎日の生活では四割ぐらいの余裕をもったほうがよい」という主旨のものです。

こういう話をする、残念なことにすぐ賛同してくれる人は少しかいません。「いつも六割では、この社会ではとてもついて行けません」という反撥が待っているのです。私とて、これまでの経験から、こういった反論は十分予想しています。そこでさらに続けます。

「もちろん日々生活していくなかで、常にコンスタントに自分の力の六割で生活できるわけではないでしょう。生活は山あり谷ありで、いろんな場合が

あるのが当然です。時には自分の持てる力の百パーセントを出し尽くしてがんばるのが必要になることもあるでしょう。場合によっては自分の実力以上の百二十パーセント発揮しないと乗り越えられないことも出てくるかもしれません。しかし百パーセント発揮するという事態が一ヶ月二ヶ月と続くとなると、疲労こんぱいで倒れてしまうという事になります。百パーセント、百二十パーセントの力でやるのは、一日、二日であれば可能ですが、これが一ヶ月二ヶ月となると、何かのあたりで故障が出てくるものなのです。例えば疲労しきつて倒れ、身体の病気が出てくることもあります。くも膜下出血など過労死の原因になるようなおそろしい病気もあります。ストレス性の病気、高血圧、胃・十二指腸潰瘍、肝臓の障害、あるいは各種のガンなども考えられます。こういった病気は、生活のスタイルに起因する事が多いものです。特にストレスから運動不足、過食などが発症の要因となる糖尿病は代表的なものです。このようなことから考えても、百パーセントの力を出すのはせいぜい二三日程度の短期間で、後で必ず休養をとる必要があると考えたほうがよいのです。」

「また、ほんとうに百パーセントの力を出してやらなければならない事が、

人生のなかでそんなにしばしばあるものなのでしょうか。このような情況が長期化する場合には、休息をとりながらやるように、ある時点で切り替えることが必要になってくるものなのです。」と、このように少し突っ込んだ説明をすると、納得顔をする人がポツポツと現れますが、しかし多くの「うつ」の患者さんたちは、容易に納得しようとはしません。

「私は自分が百二十パーセントがんばってやることを公言してきたし、それに誇りを持ち自分の存在意義を感じてきたのよ。先生の言葉はこれまでの私を否定しなさいと言うことと同じで、がまんできないわ」と語気強く迫る女性教師の方。「今この厳しい時代に、先生のいう六割主義でやっていたのでは、すぐクビになって失業してしまう。出世はそれほど望んでいないけれど、とても会社の中で六割ではやっていけないですよ」と、たしなめるようなサラリーマンの方。こんなわけで「六割主義なんてできるわけがない」という雰囲気患者さんどうし共感して、その場が盛り上がってしまうことになりました。

しかし私はそこで引き下がるわけにはいきません。「職場で、ほんとうにそれほどうも百パーセントを求められているのでしょうか。上司の発想の多

くは、確かに従業員からできるだけ多くのものを引き出す事を考えるのだといえるでしょう(もつとも、個々の場合はいろいろあるでしょうが)。これは会社の論理といえるでしょう。しかし私たちには、自分の論理というものがあるべきだと思います。つまり第一には、自分の健康を守っていくこと、次に自分の家庭を守っていくことになるのではないのでしょうか。しかも仕事というのは花火のように、一時的にパツとやればよいというものではなく、少なくとも何年という単位でみていかなければならないという性質をもっています(こんなことは言わずもがな、というところかも知れませんが、この点が案外忘れられていることが多いものなのです)。

生活の中の仕事、あるいは人生の中の仕事という視点からすると、一瞬の花火のようにパツと輝くときがあっても、その後に倒れてしまつて立ち上がることができないと言うのでは仕事の目的をまっとうできないだけでなく、時には、身体を壊してしまつて『人生を狂わす』ことになりかねません。」と、私も思わず熱が入ってしまったのです。

* *

あることのためには「自分は人生をかける」という意気込みの人に、しばしば出会います。しかし冷静に考えて、自分にとって自分の人生以上に大切なものがそんなにあるものなのでしょうか。

ごく極限的な状況を考える場合、自分の生命をなげうってほかの人を助けるといった尊い行動にかられるということはあるかも知れません。しかしこのような極限的な状況は、そんなにしばしばあるものではないでしょう。もし頻繁にそんな状況にみまわれるとすれば、その社会のシステムに非常に大きな欠陥がある不幸な場合（現代の日本には、そのような状況はほとんどないと考えていましたが、この度の大震災や原発事故のエピソードをいろいろ聞くにつれ、そうではないのではないかと、と疑うようになってはいますが）だと思われます。

もう一つの可能性としては、状況のとらえかたに問題がある場合が考えられます。これは単純にいえば、ある課題に入れ込みすぎてしまう場合と云っている。しかもその「入れ込む」動機というものに対して、十分に洞察がなされていない事が多いものなのです。

「自分がそれほどまでにして、入れ込んで追い求めるものは何なのか」ということに対して、いろいろな角度から検討されるべきだと言えるでしょう。若い人であれば、それが有名になりたい、ビッグになりたいというような願望であるかもしれません。中年になれば、それは昇進したい、金をかせいで家族にいい生活をさせてやりたい、

権力をもちたい、人の信用を得たい、あるいは自分のやりたいことを貫きたい等というようなことになるかも知れません。

* *

私は日ごろ、「人には順位をつけられないが、物事には優先順位をつけることが大切だ」ということを強調しています。ものごとを横並びにして考えることは、そのすべてを同時に取り組まなければならぬということにつながります。これは「うつ」に対して抵抗力の弱い考え方といえます。

この優先順位の第一には、ほとんどのが来る場合に、自分の生命というものが来るべきだと私は考えています。先ほど述べた、ごく特殊な例外（非常事態）はあるものの、これは誰にもあてはまるべき事柄です（通常の場合に、こうは考えないという例があるとすれば、それは考え方として、極めて異常な考え方と言わざるを得ないわけです）。先ほどの「ビッグになる」、「権力を持ちたい」等の願望なり目標なりの順位が、これに比較すると下位にくるべきだ、という点を確認する作業が必要になってくるのです（「命あつての物種」）。物事に順位をつけるということは、何かを選択することだと言い換えることができるでしょう。逆に言うと、場

合によっては、他の何かをあきらめることだと言えます。すべてを満たそうとする時、十割で働かなければならなくなるのです。

従来求めて来たものを、すべて同じように追求しながら、しかも六割でやることはできません。何かを選ぶということは、何かを捨てるということであり、順位をつけて下位のものから切っていくことを意味しています。何かを選択する、生命と健康を選択するとき、多少の便利さ、プライド、虚栄心といったものを捨てる必要がでてくることになるのです。このことは重要なことですが、往々にして忘れられやすいことです。

こう考えてくると、百パーセントの力を出し続けるのではなく、六〇七割（六割から妥協して六〇七割と、最近主張を弱くしています）でやっていくことに、落ち着くのではないのでしょうか。できるだけ長く健康に、というかまえば正解であると思えるのです。

それにしても、百パーセントの力を出しきって、出がらし状態になるまで働きつづけなければならぬと、考える人々が棲む社会、そう考える人々を次々とつくり出して来る日本の社会とは、どんな社会なのでしょう。物質的には豊かでも、人生を楽しみ健康的

に充実した生活をおくるという点からは、基本的に「貧困な」社会といえるのではないのでしょうか？

そして昨今の政治状況をみるにつけ、日本がこのような「貧困」へ、さらには戦争へと一途に突き進もうとしているように見えてくるのです。

素老人☆よもだ帳（3）

坂本一光

○無学者はそれだけで愚かなのではない

前回の主題に使った「食うために働くか働くために食うか貧しさゆえの父母の問答」は、実は、私が詠んだへたな字余り短歌である。なぜそんな歌を読んだか。尋常小学校を出ただけの父が、「働くためにも食うんじゃないか」と考えたとき、無学な父は「人が生きるとはどういうことか、働くとはどういうことか」に目を向けようとしていたのだと思う。貧しく無学な者の思考はそこで止まるほかない、と私は歌にした。しかし、こうした普通の人の思考あるいは勘の良さと、たとえばこの問題のその先にある専門的な名論文『猿が人間になるについての労働の役割』（フリードリッヒ・エンゲルス、1876年執筆）までの距離は本当に無限に遠いものなのか、ときどき疑問に思う。

どんな分野であれ、人が一生をかけて成し遂げた業績の浅いはずもないのは明らかである。また、無学でない専門家であればこそ成し遂げた業績の深さは底しれないと思う。この人なればこそ、と思うほかない仕事もたくさんある。しかし、それは、単純に有能な一人がなし得た仕事なのか。その背後に無数の貧しき無学者または非専門家の思いが層をなして積み重なっているのではないか。何かをなし得た者はそれを知らなければならぬ、そんな思いがぬぐいきれない。

無学の根源に貧しさがある。昔も今もそれは変わらない。しかし、人は無学であるというだけで愚かなのではない。それは、有学者または何かの専門家であるというだけで賢者であるわけではないのと同じである。人が思い考えるべきことは何かを知っているかどうか、賢者と愚者を分けるだろう。それを知らなければと思う。昔、「教養が邪魔してのう……」という決まり文句が必ず出る漫才があった。政治家であれ、科学者であれ、どんな分野であれ、教養が邪魔をする専門家が社会から見えなくなつてすでに久しい。

○人はなぜ酒を飲むか、エネルギー的考察
次に、無教養の父が見抜いた、酒飲み
のエネルギー的考察を紹介しよう。
これも私が小学校低学年の頃のはなしである。家の隣に、独り者のおじさんが

住んでいた。竹細工を器用にする人で、その指先が巧みに竹を操り、見る見るうちに箆になったりザルになるのを不思議な思いで見ていた記憶がある。おじさんは、朝から酒の匂いをさせていた。

あるとき、母が言った。「隣の○○さん（情けないことに、いま名前を思い出せない）は、よう働く人じゃが、朝から酒ばかり、それも焼酎ばかり飲んで飯食うとこなんか見たことがない。あんなんで死なへんのやろか」父が答えた、「おまい（お前）、酒でも焼酎でも芋やら米やらから作るんぞよ。酒になる前に食うか、酒にしてから飲むかだけの違いやろ」私はびっくりした。声には出さなかったが「父ちゃん、それは違う」と思った（気がする）。母は何も言わなかった。

父は酒を一滴も飲まず、人が酒を飲んだ話を聞くだけで顔が赤くなるような人だった。少なくともエネルギー的に父は正しい、と私が知ったのは、大学で化学を専門的に学んだあとである。父はよもだで酒の後先を言っただけかもしれないが、この思

い出は、私に、無学者の直感の鋭さと有学者の勘の鈍さを考えさせる。
動物は、生きるための栄養源を自分でつ

くることができない。地上の第一次（食物）生産者である植物を食うか、その植物を食う自分より弱い動物を食うしかない。食物連鎖という生命の連鎖である。

さて、クロロフィルという緑色色素をもつ植物は、太陽の光エネルギーと二酸化炭素及び水を使って、糖分・でん粉などの炭水化物をつくることができる。光合成反応である。

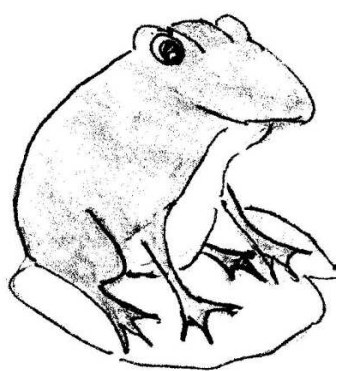
このとき他の元素と結合していない、単体の酸素が生成する。植物のおかげで、大気中に約20%の酸素があることは『ありふれた奇跡■水の話をしよう』でも触れたとおりである。植物も、生きるために自分がつくった栄養源を消費するが、消費量を超える生産を行う。それを動物が食うとどうなるか。酸素呼吸で栄養源を消費する動物は、原理的には、食った栄養源をその原料になった量の二酸化炭素と水に変え、栄養源の生産に必要であつた太陽エネルギーに相当するエネルギーを生きたため

のエネルギーとして手に入れる。原理的にはという訳は、酸素呼吸による消化は複雑な反応過程を通ること、また消化効率率は炭水化物に火をつけて燃やす時の100%にはほど遠く、未消化のまま排泄される栄養源も相当量あるためである。

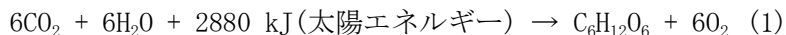
さて、ここで、酒飲みは一つの問題に、というか思いもかけなかった事態に直面する。炭水化物を人様が食う前に、ある種の発酵菌がそれをアルコール（エタノール）と二酸化

炭素に変えてしまうのである。このとき得られるエネルギーは、炭水化物を原料の二酸化炭素と水に完全に変える時に得られるエネルギーのわずか8%にすぎない。しかし、人のいい（もありませんか）発酵菌にとつては生きるにはそれで十分となる。そうすると、残り92%のエネルギーは、アルコールのなかに物質が持つ化学エネルギーとして蓄えられているに違いない。酒を飲めば、その原料の米や芋が持つエネルギーの9割以上が得られるのである。人がそれを見過ぐすはずはない。まさしく酒は百薬の長なるかな、酒ができていて酒を飲まない手はない、となる。もちろん、これは身体を壊さなければね、という話である。おうおう、酒がまづくなつてしまったのう、ご免ご免。よもだよのう。

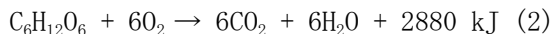
この間の事情を式と図で示せば、次のようになろう。



○光合成反応の一例



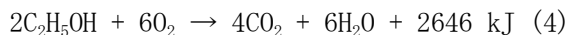
○酸素呼吸での消化反応：(1)式と(2)式は、逆の関係



○発酵菌によるアルコール発酵：(2)式に行きつくまでの、ちょっと寄り道反応

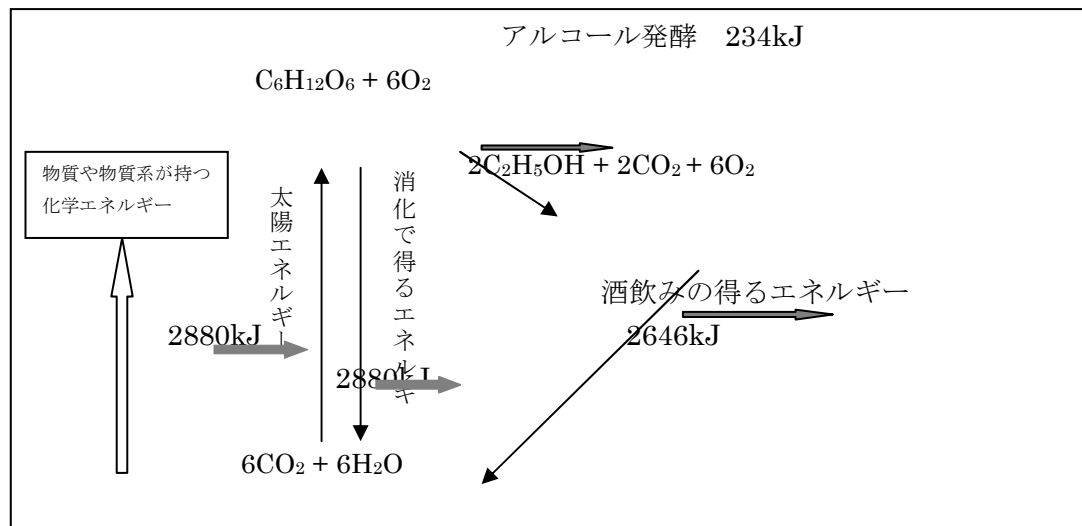


○酒飲みのエネルギー的考察：(3)式の寄り道から、(2)式への王道へ戻る反応



○ヘスの法則(エネルギー保存則の一種)：(3)式 + (4)式 = (2)式となる

(3)式と(4)式の左辺にあるもの、右辺にあるものをそれぞれ足して、左右に同じものがあれば消去して、確かめてください。



○左の図式中で化学式が表すものは次のとおり。CO₂は二酸化炭素、H₂Oは水、C₆H₁₂O₆はグルコース（ブドウ糖）、C₂H₅OHはエタノールである。光合成でできる炭水化物（芋や穀物の主成分）をグルコースで代表させ、式にしている。エタノールは飲む酒の主成分。工業用アルコールの主成分はメタノールで、飲むと中毒を起こし失明や死に至ることもある。ワインやブランデーなど果実酒が多く含み、含有量は規制されている。

《メモ欄》

私は〇〇〇〇です

住所

生年月日

電話

連絡先 子供の携帯番号

行きつけ病院名前、住所

電話

後期高齢者保険証番号

少し恥ずかしいかもしれませんが、これを下げていたら、助かることが多いと思います。(嘉)

られはいかがですか。

真糺さんの話によると、友達が昨日、観劇の帰りに気分が悪くなり救急車にお世話になったとの事。その際、家族への連絡や後期高齢者保険証の番号などすぐに分からず困ったので誰にでもすぐ分かるように名刺入れに書いておくの良いのではないかと。真糺さんは早速実行されています。友人の分も作ってプレゼントされています。みなさん試して見られてはいかがですか。

先日、連載「女89年の軌跡」を投稿して頂いている真糺さんと話しているいい事を思いつきましたのでお伝えします。

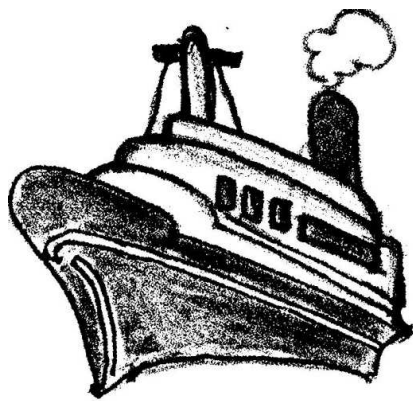
100円で携帯ストラップ付の名刺入れを買ってきて、いつも首にぶら下げておく。

編集者からの提案

地球一周旅行記(その3)

〜世界とは 人類とは何か〜

若山哲郎



船の旅はのんびりしていいだろう

な とは誰でもが思い描く夢のひとつです。それはある部分ではそのとおりですが、すべてではありません。なぜなら短期の船旅であれば一時的に日常生活を忘れ非日常の時間をすごすことが可能で文字通りのんびり感を味わえるでしょう。しかし長期になるとそうはなりません。不思議なことに非日常の中に日常が生まれてくるのです。人間というものはなかなか自分が今まで暮らしてきた生活様式や考え方を変えられません。頭で理解できても実際にそうしなければならな

いとなるとストレスや他人との葛藤が生じます。
私に乗っている船はピースボート(以下PB)で比較的安価な費用で世界が周れます。もつと高価な豪華客船もあるでし

よう。しかし多かれ少なかれ長期クルーズであれば同じような事が起こるはずで

危機にある同胞を助けることに何の疑問があるのかという人間の素朴な心理を利用した狡猾な仕掛けです。ここには与えられた関係や状況がわざと無視されこれによって誰に利益をもたらすのかという最終目的が隠ぺいされています。

さらに、このような説明会でわかったのはまだあります。この船旅を主催しているのは前回説明したようにNPO(非政府組織)であるPB。NGOは営業利益を出せない組織ですからPBは経理面をいつ

す。それはある部分ではそのとおりですが、すべてではありません。なぜなら短期の船旅であれば一時的に日常生活を忘れ非日常の時間をすごすことが可能で文字通りのんびり感を味わえるでしょう。しかし長期になるとそうはなりません。不思議なことに非日常の中に日常が生まれてくるのです。人間というものはなかなか自分が今まで暮らしてきた生活様式や考え方を変えられません。頭で理解できても実際にそうしなければならな

きつかけはオリエンテーションでの主催者が私たち乗客をどう呼ぶのかの説明の時です。私たちはあなたたちを参加者と呼びます。と勝手に宣言しました。どんな違うの、と最初は聞き流していました。しかしこの名称はこの船の基本思想を最もよく表していました。良い意味でも悪い意味でも。つまり、私たちはサービスを一方的に受けるお客様ではなく、共に船内生活をよりよくしていく共同参加者というわけです。崇高な使命です。最初は感心をしましたし、また理想に燃え行動もしました。しかしこれが問題を含んでいることが徐々にわかってくるのです。欺瞞の構造であることが。よく考えてみると社会はこのような事象に満ちています。最近話題の集団的自衛権容認の説明もよく似た形で出てきます。

アー10日で60万円以上。寄港地が

すべてオプショナルツアーですから

全部ツアーに申し込むとこれだけで相

当な金額になるわけです。しかしすべ

て不案内の都市ばかりとりあえずチエ

ックしました。ツアーのなかには品

特有のものがあります。それは現地の

人々やそことの交流というもの。しか

しこれもあとでわかりますが問題あり

の内容でした。

さてさて、この旅行記は前置きや横

道に入るのが多くてなかなか船が上陸

しません。しかし実際にもこのとおり

なのです。ほとんどが船の中の生活だ

んだんと退屈になり、また不満も鬱積

してくる頃に次の寄港地に上陸という

パターンになります。次回は厦門に上陸

しましょう。

B級サフリーマン渡世譚 その13

挨拶回り

明石幸次郎

明石の話を人事部長のKさんは、

時々厳しい眼つきで明石の顔を見なが

ら、肯きながら聞いてくれた。二年間

の工場経験は明石なりの想いがあり、

それを人事部長に聞いて貰っただけ

で、モヤモヤしていた想いが取れて、

すっきりした気分になった。

この感覚は何なのか、人に自分の苦

しみ、鬱積したような思いを伝え、そ

れを聞いてもらうだけでも、人は救わ

れることを実感した。K部長は明石の

話を聞き終えると「明石君、仕事はテ

ーマを持ってやらないと面白くない

ぞ。言われたことだけをやる、これは、

誰でも出来る。言わない事も問題は

何処にでもある。それを見つけ出し、

誰でもが出来ない難しい問題の解決を

図る。これをすれば、仕事は面白くな

る。君も工場でテーマを見つけ、これ

を仕事としてやろうと思った矢先に転

勤になったのだろうが、次は又、違っ

たテーマを今度は輸出部で見つけ出

し、その解決を図るような仕事をして、

業績をあげれば、それこそA級サラリ

ーマンやで。テーマを見つけること

だけでは、B級やぞ。

そのテーマもよう見つけられなく、

毎日忙しく目先の言われたことだけを

やっている社員はC級や。C級は何処

にでも大勢いるわ。ウチの会社は真面

目なC級サラリーマンがこの頃は、多

過ぎると人事部長としては反省してい

る。

君とか同期のウチのM君とかは、型

に、はまらんようだが、B級の素養は

ありそうだが、これからは、B級サラ

リーマンから、A級を目指して頑張っ

てくれよ。処で、君の処のK部長と一

緒にK産業の社員を面接して採った

が、Kさんは必ず、酒は飲めるかとい

う質問をしていた。酒が飲めないのは、

営業には不向きだというのがあの人の

持論のようだが、君は酒はいけるやろ

うなあ？」と聞かれたので「呑んだら、

寝てしまう方です」と答えたら、厳し

い顔になり「そら問題たなあ。今晚

から毎晩難波で飲みに行かんと駄目や

なあ。君の奥さんには悪いが、酒はあ

る程度は慣れやから、これも努力やな

あ。ハッハッハー」と最後は笑いなが

らの話しになった。「K部長が来客中で

ありましたので、Yさんに挨拶をしま

したら、本社に戻ってきたからといっ

て毎晩、難波をほつき歩いていたら

アカンぞ。勉強せえよ！と言われまし

たが「ハッハッハと笑いながら「Y君

らしい言い方や。酒を飲むことも

勉強や。酒に飲まれないように、世間を

勉強しないとなあ。君はY君を何故知

っているのや？」と、又、人事部長的な

質問をされたので、「Yさんに中学生の時

に勉強を教えてもらった事があります。

実家が近所で、私の死んだ兄貴と幼稚園

から高校まで同級生でした」「そうか、そ

らしないが面白いわ？君にとっては、Y君

は先生や。先生はいつまでも教える子には、

勉強せい、勉強せいと言うもんやで、世

間は狭いなあ。Y君が君の先生か。面白

ろいなあ」と何が面白いのか分からな

ったが、今や人事のエリートの人Yさんが、

ウチの家で兄貴と遊んでいた時に、涙を

たらして、その度に服の袖で拭いていた

事を母親はよく覚えていた。その事を調

子に乗って人事部長の前で話すのだけは

思い止まった。明石は、人事部長の周り

から目に見えない重い空気を感じて、こ

らで、失礼しようと思ひながら、タイ

ミングを見計らっていたら、K部長は声

のトーンを抑えて、手招きしてもう少し

席の近く寄れと明石を傍に寄せ「君はウ

チのM君と同期やなあ。君の結婚式の司

会までしたそうなので仲がエエのやな

あ。彼は人事部的な社員ではないので、

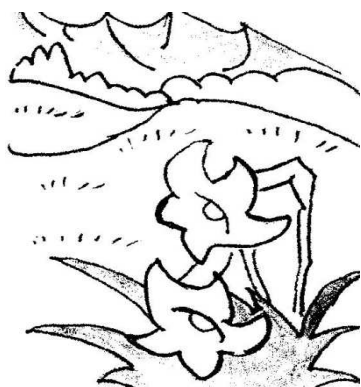
周りからは評価されていないのや。要す

るに君と一緒に、型に嵌めようと思っ

ても、嵌らないのや。俺はM君は人事部

の型に嵌めると、彼の良さがなくなると思

い、彼の上司にも言っているが、



老人の戯言

駒田明克

上司は上司の考えがあり、型に嵌めようとしている。M君も多少は型に嵌ったような素振りをしたら良いのやが、それが出来ないのや。組織には毛色の違う社員も居ないと組織が停滞してしまう。特に人事部は一見真面目で、言われた事はこなすだけの社員が多くなってきた。その社員が選別して新入社員を採るので最近の社員は真面目で、お利口そうな社員ばかりが増えてきた。これは、会社にとつては、C級社員の集まりになつてしまい、

そうなれば、決して会社は大きく発展しなくなる。俺は、必ず変わった社員も採れと採用課の社員には指示しているのやけど、安全、安全で、真面目で素直そんな社員しか採用しなくなつた。会社にはA級もB級も居ないといけない。型に嵌らない社員を使うのは上司の度量もないと難しいのやが、そういう部下を使つて上司は又伸びるのや。自分が使いやすい部下ばかりを評価しているだけでは、その上司も伸びない。M君と話す機会があれば、腐らないように激励してやつてくれ。それと、多少は大人になつて型に嵌つたような素振りも見せたらと、言つてやつてくれ。俺は、彼を人事部において置き、この人事部の空気を多少は変えたのや。明石君、君の処の、輸出第2部のK部長は、その点、型に嵌らないし、部下も型に嵌めようとしな人や、

な歌と曲」を子供たちに与えたいとして、そうした純麗な子供の歌を「童謡」と名づけました。

○童謡を次の世代に

もつと広めて残そう

私の子供のころ、ラジオから流れてくるのは川田孝子、正子姉妹、古賀さと子、安西愛子、松田トシのきれいな声の童謡の数々。子供の頃聴いた歌は不思議と今もメロディー、歌詞ともよく覚えています。

今聴くと、あのころの事が鮮明に思い出され、何かしらほのぼのとした気持ちになります。

これらの童謡は、日本独自の音楽ジャンルらしく、外国には無いそうです。

童謡とは広義には子供向けの歌をさします。狭義には、日本において大正時代以降、子供に歌われることを目的に作られた創作歌曲を目指すそうです。

古くは子供の歌といえ、いわゆる「わらべ歌」でありました。わらべ歌、子供の歌という意味で用いられてきた童謡という語に「子供に向けて創作された芸術的香気の高い歌謡」という新しい意味付けをしたのは鈴木三重吉だそうです。

「懐かしの童謡の数々」

かなりや	作詞	西條八十
作曲	成田為三	大正7年
背くらべ	作詞	海野厚
作曲	中山晋平	大12
十五夜お月さん	作詞	野口雨情
作曲	本居長世	大9
叱られて	作詞	清水かつら
作曲	弘田龍太郎	大9
七つの子	作詞	野口雨情
作曲	本居長世	大10
赤とんぼ	作詞	三木露風
作曲	山田耕作	大10
てるてる坊主	作詞	浅原鏡村
作曲	中山晋平	大10
ゆりかごのうた	作詞	北原白秋
作曲	草川信	大10
春よ来い	作詞	相馬御風
作曲	弘田龍太郎	大12
肩たたき	作詞	西條八十
作曲	中山晋平	大12

しまった。

こがねむし 作詞 野口雨情
作曲 中山晋平 大12
証城寺のためきばやし

作詞 野口雨情
作曲 中山晋平 大13
あの町この町 作詞 野口雨情

この道 作曲 中山晋平 大14
作詞 北原白秋
作曲 山田耕作 昭5

これらの童謡は60歳代以降の人なら誰でも、メロディー・歌詞をほぼ完璧に口ずさむことが出来るでしょう。

これらによって、子供のころに豊かな感性や情緒を育むことが出来たことでしょう。子供の無限の空想の世界が広がったことでしょう。

戦後、初めての敗戦で国土が焦土化したところから日本人としての心を失うことなく、立ち上がり、創意・工夫を駆逐して今日の経済発展を遂げたのも、少々大げさかもしれませんが、われわれが幼少期にいつも耳にしていた童謡のお陰かもしれません。

今、この童謡がテレビやラジオから流れることはほとんどありません。小学校の音楽の時間でも取り上げることが少なくなっております。

最近ではアニメソングなどに押され、家庭でも歌われることは少なくなっております。

残念ながら、この社会の変化を変えるなど到底出来ることはありません。となれば、世界に誇れるこの童謡の数々を、われわれが意識して孫・ひ孫伝えてやるしかないですね。

ケイタイ依存症に

なっていないませんか

小生、本当は携帯電話が大嫌いです。家内も携帯を持っていません。小生の場合、嫌いでも何かにつけて便利というだけで連絡用の道具として持っています。でも嫌いです。

先日、ラジオを聴いていたら永六輔さんも携帯電話が大嫌いでむろん持っていないとのことでした。

私と同じように感じつつ日々を過している者も結構いるのではなかと、ひそかに思っています。表面化しないのは、それを口にしたら、時代おくれと侮辱されると思っているからだけなのではないでしょうか。

年配の者が次世代の者の風俗を嘆くのは、いつの時代でも変わらないことは百も承知しています。しかし、昨今の若者の様子を見てると言わざる負えません。車の運転中（女子に多い）携帯電話をしている若者、横断歩道を渡りながら携帯を見ている馬鹿、公園のベンチに座りながらメールをずっと

している暇人、少しはきれいな空気を吸う冥想に耽つては……。おまけに、最近スマートフォンなるツールができました。昔、大宅壮一さんが、テレビができた時に一億総白痴化といったそうですが、これに、拍車が掛かりそうですね。

夏へのしつらえ

昔、旧家では、夏が近づくと夏のしつらえを始めたものです。年末に新しく張り替えた障子を簾戸にいれかえ、陽をさえぎるのに簾をかけたものです。

正しく、エコという言葉は嫌いですが、正に自然の風を取り入れる生活様式です。しかしながら、今日ではその障子すらなくなつてきております。

京都の町屋では今も夏の準備のしつらえとして、障子から簾戸に入れ替えているそうです。

最近の日本男子マラソンの低迷

（箱根燃え尽き症候群）

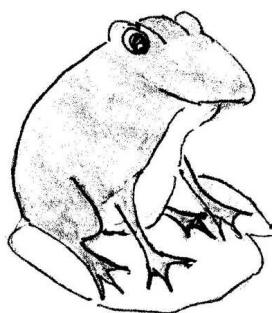
日本男子マラソン陣は、瀬古選手、森下選手、宗兄弟、谷口選手、中山選手などの活躍もあり、世界のトップクラスを行くものでありました。記録的にも2時間6〜8分台の選手がひしめいておりました。

ところが、ここ3、4年、日本のトップクラスの成績をみると、8分を切る選手は皆無、いずれの日本の大会もトップ集団を形成するのは外国勢。日本人選手は最初からトップに食らいつく気持ちがあるのか、ないのか、中盤からズルズル引き離されて、よくやつても4、5番。解説者の口から出るのは、よくやりましたね。日本陸連の関係者の口からは不甲斐ないの一言を聞いたこともない。日本陸連のアホども。

この低迷状態はどうして起こってきたのか、小生なりに思うに、それは高校生は全国高校駅伝を中心に長距離の強化を図っています。しかしながら、個々の選手の思いは箱根駅伝を走り活躍することにあります。

晴れて、関東の大学に入り、4年間、箱根を目指して激しいトレーニングに明け暮れます。

その結果、ほとんどの選手がエネルギーを使い果たし、いわゆる、箱根燃え尽き症候群に陥っているように思えます。



なま禅、大疵のもとひ

大江雉兔

稲妻に悟らぬ人の貴さよ 芭蕉

一足飛びに夏がやって来たような暑さだが、ここ数年来、夏といえばゲリラ豪雨が定番である。そのうち俳句の季語として認知される日が来ることだろう。そこで右の吟なのだが、芭蕉の時代には現代のようなゲリラ豪雨はなかった。それでも稲妻は夕立とセットになる季節物であり、季語として機能していたようだ。

ということ、今回はこの吟が話題であり、稲妻の話なのだが、ここに登場する稲妻は季節感を出すだけのものではないことをまず抑えておこう。季語を置くのは俳諧の決めごとに従ってのことなのだが、この稲妻が呼び起こしているのは、季節感ではなく、とある人物造型である。それも、どこにでもいる、やや面倒くさいタイプ、いわゆる「講釈たれ」である。芭蕉の文章に限らず、現代人の感覚で古文が読みづらいのは、一つには文法や語彙の違いがある。しかし、それら以上に大きな壁となるのは、言葉を通して思い描く映像が、昔の人と今の人とは、大きく異なっているという事実だろう。仮に文法や語彙を正しく処理できたとしても、その営みの上での現代語訳が今ひとつピンと来ないとすれば、それは同一

の言葉が喚起する映像に埋めがたい落差があるからである。たとえば右の一句。「稲妻」と言われて現代人が連想するのはなんだろう。放電と発光を伴う自然現象だろうか。多少の個人差はあろうが、概ねその近くに収束するはずである。ところが生活に仏教思想が根付いていた時代であれば、稲妻や火花に人間の生涯を重ねることが一般的な思考形式だった。一瞬だけ光って、そして消えてしまう、その儚さに人の生涯を見るのである。そして、そんな經典由来の発想がスタンダードだったから「稲妻に悟る」と出てきた時点で、人生の儚さをいう文脈が連想されるのである。さらに、そうした文脈が前提になるからこそ、稲妻といって人生がナンタラカンタラとのご託を並べたりしない人が逆に「貴く」思えるのである。

実は、この俳句、作られた状況が比較的にリアルに推測できる。ある年、近江を訪れた芭蕉は当地の菅沼曲水に手紙を送る。そこでは当地の俳風が「一筋の道に出ることかたく、古き句に言葉のみ荒れて、酒くらひ、豆腐くらひなどのしる輩のみ」云々と評されており、続けて稲妻の吟が添えられる。この連中は古風から抜けられず、ご託を並べるだけで、集まっても飲み食いするばかりと、さんざんな評価なのだが、おそらく土地の有

力者が主催する句会に招かれたのだろう。義理もあつて顔を出してはみたものの、集まったのは訳知り顔で俳句を論じる者ばかり、芭蕉には何の刺激もなかったに違いない。稲妻をテーマにしても諸行無常をもっともらしく言うのが関の山となれば、さぞ憂鬱な句会だったろう。そして出来たのが、冒頭の稲妻吟である。そこには次のような詞書きが添えられる。「ある智識のたまはく、なま禅、大疵のもとひとかや、いとありがたく覚えて」。

とある高僧がいった、生半可な悟りは大けがのもとであると。まったくその通りと思ったところで一句、……

どんな分野につけ、トンチンカンな講釈ほど鬱陶しいものはない。芭蕉を前にして、近江の人々はおのれの俳論を披瀝したくなつたのだが、所詮は片手間の営み、芭蕉の基準に堪えるものではなかったということか。似たようなシチュエーションで、私自身にも思い当たることは多い。なま学問というか、ほんの少しだけ聞きかじつたに過ぎない知識なのに、それをもっともらしくひけらかしてしまふのである。つまみ食いの知識ほど、そんな誘惑に駆られる傾向が強くなるようだが、「なま禅、大疵のもとひ」と合わせ、稲妻の吟を戒めの言葉にしておきたいものである。

女人結界7の続き

十三世紀後半に成立した『天狗草紙』にはじめて「穢多(えた)」という差別語が登場する。非人や河原者にたいし、「穢れ多い」悪人であると卑賤視するのである。ここでは、畏怖するという感情は消え、汚穢を強調して嫌悪し、排除しようとする。こういう意識は十二世紀には芽生えていたと思われるが、鎌倉新仏教は、嫌悪され排除された悪人や非人、女性の救済をおもなテーマとした。

女性のケガレは産穢と血穢がある。

古事記にも記されているように、古代では出産は産屋で行われた。そこにはケガレという意識はない。むしろ畏怖であった。出産は見てはならない聖なる現象であった。九世紀になると犬の産穢が内裏で問題となり、出産はケガレであると忌避されるようになる。八二〇年に産穢は七日間と規定され(弘仁式)、その間は産婦は神事、祭事から遠ざけられた。このように産穢が制度化されるが、出産という生命が誕生する現象にたいする畏怖は依然としてつよかったと考えられる。

血というものにたいする意識も変容する。『播磨国風土記』は、豊作を願って、稲の種を鹿の血に浸してから撒いたとか、穴(しし)の血をもって田を作るから川の水は不要であったことなどを伝えている。八世紀には、血は豊穣をもたら

す呪術的力をもっている」と信じられていた。

古事記には、ヤマトタケルとミヤズヒメが結婚するときの様子を記している。東征を終えて尾張に帰ってきたヤマトタケルは婚約者のミヤズヒメに再会し、食膳を受ける。そのときミヤズヒメの着物の裾に月の障りのものがついていて、それに気づいたヤマトタケルは、細いなおやかな腕を枕にあなたと寝たいが、あなた

の襲（おすい）の裾に月が出てしまったことよ、と歌を詠う。ミヤズヒメは、あなたを待ちきれなくて、私の着ている襲の裾に月が出てしまったのでしよう、答えた。そして二人は結婚するのだが、月

経にたいする嫌悪や忌避は微塵もない。九世紀に入ると、血穢が史料に見られるようになる。血のケガレは女性の月経

だけではなく、男の出血もケガレとされた。たとえば祭事場で鼻血を出したとか、けんかをして出血したとか、痔の出血など血穢の記録が残っている。女の月経は血穢の一部にすぎなかった。

九世紀後半になると、月経の忌避が後宮の女官を対象に制度化される『貞観式』。ただ、忌避の期間は産穢のように規定がなく、伝染もしないとされた。このころから女性固有のケガレが意識されるようになる。

十世紀初めに、賀茂神社の斎院が月経となり、祭事から遠ざけられるという

事件が起こり、これを機に京都に月経の忌避が広まり始める。

十一世紀になると、霊地、聖域は清浄を保つために極力ケガレは排除しなければならぬと認識されて、女性不浄観が強調されるようになり、女人禁制が広がりを見せるのである。

女性は罪深い存在であるという仏教の罪業観と、女性は穢れた存在であるというケガレ観が融合して、十三世紀に独特の女性像をつくりあげたわけである。この女性不浄観の形成過程は被差別民の形成過程と併行しており、同じ土壌から発生しているのである。

中世から近世にかけて女性は抑圧され、排除され、賤視され、自由がない奴隷のような生き方を強いられたいように思われるが、じっさいはそうではない。三十五年間日本に滞在した宣教師ルイス・フロイスの『日欧文化比較』『ヨーロッパ文化と日本文化』岩波文庫）や戦国時代の笑い話集『醒睡笑』（岩波文庫）などをみれば、女性の地位の低さや家への隷属という暗いイメージの女性像はくずれる。夫婦生活における女性の強さ、性的にも男にたいして絶対の優位を保っている姿が描かれている。

この文章を書くための参考文献にもなった網野喜彦さんの『日本の歴史をよみなおす』（ちくま学芸文庫）は、はじめて読んだとき目からうろこが落ちる思いであ

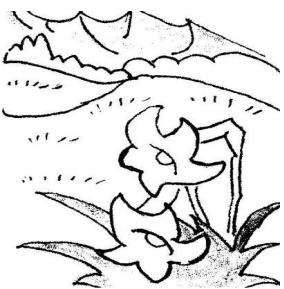
った。

フロイスの『ヨーロッパ文化と日本文化』は当然、偏見や思い込みなどもあるだろうから、考証が必要だが、網野さんがいうようにほぼ事実とみてまちがいないだろう。第二章 女性とその風貌、風習について」から三箇所ほど引用して、この連載を終えることにする。

「ヨーロッパでは未婚の女性の最高の榮譽と貴さは、貞操であり、またその純血が犯されない貞潔さである。日本の女性は処女の純潔を少しも重んじない。それを欠いても、名誉も失われなければ、結婚もできる。」

「汚れた天性に従って、夫が妻を離別するのが普通である。日本では、しばしば妻が夫を離別する」

「ヨーロッパでは、妻は夫の許可が無くしては、家から外へ出ない。日本の女性は夫に知らせず、好きな所に行く自由をもっている」（了）



真 無為 無形？

造化者 無私

自然 一？

無名 自生？

‘道’ってなんやねん？6



最終回

第六章 神秘な女体

道の満ちた谷に在る神は、けつして死なないのさ。

それは

すべてを産みだす神秘な女体

と言えるものなんだ。

その門をくぐってゆくと

天地の根つこに達する。

そこから湧きでるものは

滾滾として尽きない――

まったくタオの命はいくら掬んでも

いくら掬んでも

掬みつくせないもののさ。

谷神は死せず、是れを玄牝と謂う。玄牝

の門、是を天地の根と謂う。綿綿として

存するが若く、之を用いて勤まず。

第十章 玄にある深い力

われら心と肉体を持つものは
ひとたびタオの道につながれば精気に

みちて柔らかいさまは

生まれたての赤ん坊みたいだ。

その無邪気な心は

よく拭^{ぬぐ}った鏡みたいに澄んでいる。

その人が国を治めれば

ただ民を愛するだけで充分なんだ。

天と地の出てきた神秘の門

あれを開いて、母と遊ぶことができるんだ。

無理に知ろうなんてしなくとも

四方八方、とてもよく見えている。

もちろんタオの人も

産んだり愛したり養ったりするさ、
しかしそれを自分のものとしらない。

熱心に働いても

自分のしたことだと自慢しない。

ひとの先頭に立ってリードしても

けっして彼らを支配しようとはしない。

これを玄德というんだ、すなわちそれは
ひとの玄^おにある深い力が、

いちばんよく働くことなんだ。

能く知を以てすること無からん乎。天門^{かいてう}
開闢^しして、能く雌^{した}為らん乎。明白に四達^{したつ}
して、能く知を以てすること無からん乎。
之を生じ之を畜^{やしな}い、生じて有せず、為し
て恃^{たの}まず、長じて宰^{さい}せず。是れを玄德^{げんとく}と謂
う。

第十四章 形のない形だけの在るところ

五感でなんか確かめられないものこそほ
んとの実在なんだ。

微小すぎるものは

いくら見ようたつて見えない。

あんまり幽かな音というのは

いくら聞こうたつて聞こえない。

滑らかすぎる表面は

触わったつてそれと感しない。

この三つの微のきわみは

微細であるだけに、互いに

融けあえる。そしてこの三つが一つに

融けあっている空間――

それは無か空に見えるけれども

充実したもの、

もつとすごい実在といえるわけだ。

そこではかぎりなく昇つたつて

ただ明るいというだけじゃないし

かぎりなく下におりたつて

ただ真つ暗なばかりじゃない。

すべてが絶え間なく連続し、変化し、動
いていて、

やがてはあの名のない領域に戻る。

これは形のない形だけの在るところ、
無いものだけの在るところ、すべてが
捉えがたい抽象できているとも言える。
そいつの後をついて行つても
背中は見えないし
前に廻つてみたつて
顔つきなんか分からない。

どうやったら掴まえられるかつて？

まあ、

いまの自分のなかに、そして

萬物のなかに

タオが働いてると自覚することだ。それ

は

太古の太古のときから伝わつてきている

と想像する。すると

道の全体像が

現れてくるかも知れない。

之^{これ}を視^みれども見えず、名づけて微^びと曰う。

これを聴^きけども聞こえず、名づけて希^きと曰

う。これを搏^されども得ず、名づけて夷^いと曰

う。此の三者は致^ち詰^{きつ}す可からず、故に混^まじ

て一^{いつ}と為す。一は、其の上^{かみ}は皦^{きやう}ならず、

其の下^{しも}は昧^{まい}ならず。繩^{じよう}繩^{じよう}として名づく可

からず、無物に復帰す。是れを無状の状、

無物の象^{しやう}と謂う。是れを惚^こ恍^{ほう}と謂う。之

を迎^{むか}うれどもその首^{くわい}を見ず、之に随^{したが}えど

もその後^{しうご}を見ず。古^この道を執^とりて、以

て今^{いま}の有^{ゆう}を御^おす。能く古^こ始^しを知る、是れを

道^{どう}紀^きと謂う。

第二十一章 君の here-Now

道^{ミチ}に従つて働く。パワーは
どんな顔や姿なのか。

こう訊^きかれれば、確かに

それは漠^{もく}として広く暗いもの、

把^とえどころがないもの、としか言えない。

だがね、

すべてのものの奥に働くパワーは

それ自体、

ひとつのイメージになるはずだ。

すべての物の内に働くもの、

言わば、もののエッセンス

すべての形の原形

それは

あらゆるものを成長させる種だ、

ライフ・エナジーの根源なんだ。

まあ、こんなふうによえば

タオのパワーのイメージが

すこしは出てくるかもしれん。

なにしろこれは

太古から今まで続いているから

仮りに名づけたタオという名は

けっして消えうせないし、

多くの人びとがタオを体得してきたん

だ。

これを、

どうやったら知ることができるかつて？

それは君の here-Now^{ヒア ナウ}のなかで

君全体の奥にあるものを感じる――

それしか手はないんじゃないかな。

孔徳の容、唯だ道に是れ従う。道の物為る、

唯だ恍^{わう}唯だ惚^ぼ。惚^ぼたり恍^{わう}たり、其の中に象

あり。恍^{わう}たり惚^ぼたり、其の中に物有り。窈

たり冥^{めい}たり、其の中に精有り。其の精甚だ

第一章

これが道だと規定しうるような道は、恒常不変の真の道ではなく、
之が真理の言葉だと決めつけうるような言葉は、絶対的な真理の言葉ではない。
天地開闢以前に元始として實在する道は、言葉では名づけようのないエトヴァス（何か）であるが、
万物生成の母である天地が開闢すると、名というものが成立する。
だから人は常に無欲であるとき、名をもたぬ道のかそけき実相を見るが、いつも欲望をもちつづけるかぎり、あからさまな差別と対立の相をもつ名の世界を観る。
この道のかそけき実相およびあからさまな差別と対立の相の両者は、根源的には一つであるが名の世界では二つに分かれ、
いずれも不可思議なるものという意味で玄とよばれる。
そして、その不可思議さは玄なるが上にも玄なるものであり、
造化の妙用に成る一切万物は、そこを門として出てくるのである。

第四章
道は沖つぽで、いくら注いでも一杯になるといことがない。

真なり、其の中に信あり。今より古に及ぶまで、其の名去らず、以て衆甫を関る。吾れ何を以て衆甫の然るを知るや、此れを以てなり。

第二十五章

「大いなるもの」は帰ってくる

タオは天と地のできる前からある。
その状態は
あらゆるものの混ざりあつた混沌だ。
そこは
本当の孤独と静寂に
満ちていて、すべてが
混ざりあい変化しつづける。
あらゆるところに行き渡り、
すべての物を産むのだから、
大自然の母と言ってよいかもしれぬ。
こんな混沌は名づけようがないから、
私は仮に道と呼ぶんだが、もし、

この働きの特色はなにか、と訊かれれば、
それは大きいものだから
遠くまで行く。
遠くまで行くから
帰ってくる。

このタオの偉大さを、
受けついだ天は偉大であり、
それを受けついだ大地は偉大なのだ。
その大地にいる人間だって、
タオにつながるときは偉大なんだよ。

だつてその人は

大地に従つて生きているからだ。

大地は天につながっているし、

天は道に従い、

道はそれ自体、自らの動きであり、それこそ

最も大いなる自然と言えるんだ。

物有り混成し、天地に先だちて生ず。寂たり寥たり、独立して改まらず、周行して殆まず。以て天下の母と為す可し。吾れ、其の名を知らず、之に字して道と曰い、強いて之が名を為して大と曰う。大なれば曰に逝き、逝けば曰に遠く、遠ければ曰に反る。道は大なり。天は大なり。地は大なり。王も亦た大なり。域中に四大有り、而して王は其の一に居る。人は地に法り、天は地に法り、道は自然に法る。

第二十八章 「アニメス」と「アニマ」

どんな人のなかにも
男性素質と女性素質がある。

自分のなかの雄々しさを知って

さらに優しさと柔らかさを守れば

君は天下の谷のように

何でも受け容れる存在になる。

谷水のようなパワーを湛えて

タオの母とつながる赤ん坊となる。

君のなかにある白くて清いものを

意識しつつ、

黒く汚れたものとともに居る。

そういう在り方こそ

この世の生き方の手本なんだよ。

世間の名誉や贅沢を知つたうえで

いつも謙遜した気持で居る。

そおうなれば、あの

天下の谷の、

絶えざる水につながる。

割られる前の木のように、

素朴なままでいられるんだ。

この木が割られると

数多くの容器になるわけだが、

自分のなかにあるものを割るときには、

あまり細かくしないがいい、

そうすれば元の木の素質が

あまり失われない。

其の雄を知りて、其の雌を守らば、天下の谿と為る。天下の谿と為らば、常德離れず、

嬰兒に復帰す。其の白を知りて、其の黒を守らば、天下の式となる。天下の式と為らば、常德忒わず、無極に復帰す。其の榮を知りて、その辱を守らば、天下の谷と為る。天下の谷と為らば、常德乃ち足りて、

樸に復帰す。樸散ずれば則ち器と為る。聖人、之を用いば、則ち官長と為す。故に、大制は割かず。

それは奥深くて万物の生まれ出る大本のようだ。それは万物の鋭さを挫き、万物の紛れを解きほぐし、万物の輝きを和らげ、万物の塵れに己を同じくする。

それは深くたたえて常存不滅の存在のようだ。

わたしにはそれが誰の子どもなのか分からない。

どうやらそれは天帝に先だつ実在のようだ。

第六章

谷間の神靈は永遠不滅、

それを玄妙不可思議なメスという。

玄妙不可思議なメスの陰門は、

これぞ天地を産みだす生命の根源。

綿く綿く太古より存えしか、

疲れを知らぬその不死身さよ。

第十章

生命の車に乗りて、無為の道しつかと抱き、離るることしばしだになし。

精気を外に洩らさず、心身のこよなき柔

かさを保ち、その生い生いしは

嬰兒のごと。

心の鏡に汚れを拭い、人の世の塵、それを傷つくることなし。

民を愛し国を治めて、人為のさかしらすべて打ち捨て、生死のうつろいには女性のごとただ身をゆだねゆく。

明らけき英智は四方を照らすも、その英智を蔵めて愚かなりや其の容貌。

天地の、万物を生みいだし養い、

生みいだせども吾が所有とせず、

為えども誇ら顔せず、

育つれども支配者を気どらざるがごとくす。

これぞこれ玄じき聖人の徳。

第十四章

目をすえて見ても何も見えないから、

「夷」——色が無いという。

耳をすまして聴いても何も聞こえないから、

「希」——声が無いという。

手で打ってみても何も手ごたえがないから、

「微」——形が無いという。

だが、この三つの言葉では、まだその正

体が規定しつくされていない。

だから。この三つの言葉を混ぜあわせて

一つにした存在なのだ。

その上部は明らかでなく、その下部は暗

くない。

だだつびろくて名づけようがなく、物の

世界を超えたところに立ち返っている。

これを状なき状、物の次元を超えた象

というのだ。

これを「惚恍」——ぼんやりとして定かならぬものというのだ。

前から見ても、その顔が見えるわけではなく、後から見ても、その尻が見えるわけでない。

太古からの真理を握りしめて、今も眼前

の万象を主宰している。

歴史と時間の始原を知ることのできるも

の、それを道の本質とよぶのだ。

第二十一章

大いなる徳のある人の容、ただ道にこそ

従っている。

そもそも道という実在は、ただ仄暗く定

かならず、

定かならず仄暗い中にも何やら象があり、

仄暗く定かならぬ中にも何ものかが実在

している。

奥深く幽かな中に靈妙な精気がこもり、

その精気はこの上なく真実で、その中に

創造者としても明証がある。

それは昔から今に至るまで、変わるこ

なく道とよばれて、

いふなれば、あまたの族長たちを統べる

本家の総領。

族長たちの実状が、どうして私に分かる

かといえは、

それは総領である道によつて分かるのだ。

第二十五章

混沌として一つになったエトヴァスが、

天地開闢の以前から存在していた。

それは、ひっそりとして声なく、ぼんやりとして形もなく、

何ものにも依存せず、何ものにも変えられず、

万象にあまねく現れて息むときがない。

それは、この世界を生み出す大いなる母

ともいえようが、

わたしには彼女の名前すら分らないのだ。

仮に呼び名を道としておこう、無理に名前をつければ大とでも呼ぼうか。

この大いなるものは大いなるが故に流れ

動き、

流れ動けば遠く遙かなひろがりを持ち、

遠く遙かなひろがりをもてば、また、も

との根源に立ち返る。

かくて道は大なるものとよばれるが、

大なるものといえは、天も大であり、地

も大であり、帝王もまた大である。

つまり、この世界には四つの大なるもの

が存在するが、

帝王がそのなかの一つを占めているのだ。

その帝王は人類の支配者として大地の在

り方に法ってゆき、

大地はさらに天の在り方に法ってゆき、天はさらに道の在り方に法ってゆく。そして、道の根本的な在り方は自然ということであるから、

道はただ、自然に法って自在自若である。

第二十八章

男性的な剛強さの何たるかを弁えた上で、

女性的な柔軟さをじつと持ちつづけてゆけば、

世界じゅうが慕い寄る大いなる谷間となり、世界じゅうが慕い寄る大いなる谷間となれば、

恒常不変な無為の徳が身に宿って、嬰兒の心の無知無欲に立ち返る。

ロゴスの明晰さの何たるかを弁えた上で、カオスの味さをじつと持ちつづけてゆけば、

世界じゅうが彼に法る大いなる師表となり、

世界じゅうが彼に法る大いなる師表となれば、

恒常不変な無為の徳に違ふことなく、果てしなき未知の世界の根源に立ち返る。

人の世の栄達の何たるかを弁えた上で、汚辱の生活にじつと甘んじてゆけば、

世界じゅうが帰服する大いなる谷間となり、

世界じゅうが帰服する大いなる谷間となれば、

恒常不変の無為の徳に満ち足りて、

樸の素朴さにそのまま立ち返る。

樸の素朴さが切り裂かれると、さまざま

な特殊技能者ができあがるが、聖人が彼らを用いるときには、

せいぜい一官の長に任ずるにすぎない。

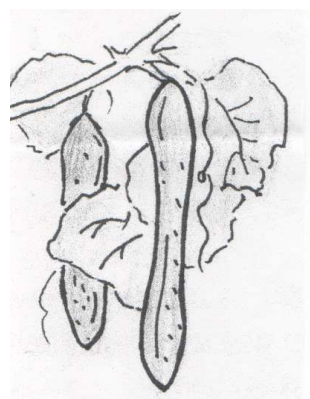
だから結論をいえば、こうだ。

大いなる截断は人為の截断を用いる

ことなく、

樸の素朴さをそのまま全うするのだ、と

*福永さんは道をさす言葉として「エトヴァス (etwas)」というドイツ語をよくもちいる。英語の something のような言葉で、「名状しがたいひとかどの何か」といった意味。(丁) (猿)



挿絵は鵜飼さんです。

編集後記

沖縄では入梅したそうです。

今年は空梅雨で7月に雨が降るとか。夏の暑さも亜熱帯なみになりそうです。

くれぐれも熱中症には注意したいものです。

おかげさまで「芥川だより」も投稿者が増え充実してきました。日頃の想いを伝え会うことは、孤立化しやすい昨今、大事な事だと思います。

話せば、何でもないような事を独りで抱え込むとストレスになります。

おおいに井戸端会議をやりましょう。

今回は、ページ数が増えました。山猿さんの原稿を通して読んで頂いた方がいのではないかと判断したからです。

道とは難しいテーマです。私も理解できないので、なんとも言えないのですが、興味はあります。

私は、理解できないくせに、どういう訳か、人の生きざま、死にざまを考える癖があります。

新たに「死について」(仮称)、「哲学の小道」(仮称)、大人の今昔物語(仮称)など、おもしろ、おかしく、わかりやすい企画を予定しておりますので、ご支援をお願いします。

(嘉)